

今日の説教のポイント <マタイによる福音書5章7節~12節>

「憐れみ深い人々」「心の清い人々」「平和を実現する人々」「義のために迫害される人々」。誰が考えても、どれも素晴らしい姿に思われます。では、もう聞かなくても分かったと置いていいのでしょうか？ そうではありません。

「憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。」(7)

憐れみ深くあると憐れみを受ける。それはユダヤ教のラビ(教師)が人々に教えた代表的な教えでした。否、世界中、どこでも教えられており、そうだと同意する教えです。イエスさまも同じことを教えられただけなのでしょう。そうではありません。イエス様はこの教えを語られる時、もう一つのことと、セットにしてよく次のように語られました。『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」(9:13。他に 12:7)。イエス様は、旧約の預言者が語った神様について教えようとされたのであり(ホセア書6:6)、同時に、イエス様ご自身がそのこと、すなわち本当の憐れみ、真の神様の憐れみを示そうとされたのです。

人は皆、憐れみ深くあることの大切さは知っています。しかし、教えられて、納得はするし、そうありたいと思うけれども、色んな理由をつけて、結局は、「憐れみ深くはなれないし、こうこういう場合にはなる必要もない」と言いたくなるのが私たちではないでしょうか。それは仕方ないことなのでしょう。たとえ仕方ないとしても、憐れみ深くあることができない自分自身もまた幸いや平安から遠い状態にあるはず。聖書が教える罪とは、何か他人に悪いことをするようなことだけでなく、自分自身が平安の中に憩えないような状態とも関係しています。罪=神を向いて生きていないこと、がそのような状態を作り出しているのです。「正しい人は一人もいない」(ローマ書3章)とは、「私は平安だと言える人は一人もいない」ということをも意味しています。しかし、イエス・キリストは、私たちが「憐れみ深くはなれないのは仕方ないだろう」と言うようには言われず、その私たちのために十字架におかかり下さるまで、憐れみ深くあり続けて下さったのです。それが、「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」と言われていることの意味です、私たちを神様のもとに立ち帰らせて下さるのです。

イエス様は今日の箇所、確かに、「~な人であれ」と呼びかけられています。しかし、それはただ道徳的・倫理的に正しいことに取り組みとされているのではないのです。これだけの神様の憐れみ深さを知らされたことを覚える中で、「このように生きなさい、それが平安への道なのですよ」と教えて下さっているのです！